

共同研究プロジェクト「マレー世界における地方文化」 2009 年度第 2 回研究会

日時：2009 年 11 月 15 日（日）13 時 30 分～18 時 00 分

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 306

プログラム：

1. 菅原由美（天理大学）
「ペゴン雑誌 Menara-Koedoes (Kudus) 巻頭言」
2. 富田暁（大阪大学大学院）
「ファジャル・サラワク (Fajar Sarawak) 巻頭言」
3. 新井和広（慶應義塾大学）
「イスラーム雑誌『alKisah』とサイドの商品化について」

本年度第 2 回研究会は 11 月 15 日に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 306 号室において開催された。今回の発表は 3 つで、そのうち二つはジャウィ定期刊行物巻頭言の翻字・翻訳・解説であり、最後のひとつはインドネシアで発行されているイスラーム雑誌の内容に関するものであった。

1. ペゴン雑誌『ムナラ・クドゥス Menara-Koedoes』巻頭言

この雑誌『ムナラ・クドゥス』は、1925 年にジョグジャカルタで出版が開始されながら、編集者サイドの問題から、その後いったん休刊となり、編集者の交替により、出版が再開された雑誌である。今回研究会で読んだ記事は、その再開第一号の巻頭言である。出版地はジョグジャカルタであるが、インドネシア国立図書館『インドネシア雑誌カタログ』によると、出版社はムハマディヤのクドゥス支部で、1930 年まで出版は確認されている。この雑誌は、アラビア文字のジャワ語、すなわちペゴンで執筆されている数少ない貴重な例であるが、ペゴンの選択はおそらくクドゥスという土地柄に関連しているものと予想される。ジャワ島北海岸に位置するクドゥスは、ジャワの「九聖人」にも関わり、王宮が位置する南部一帯よりイスラーム化の歴史が古い地域であり、住民の多くはジャワ文字よりも、アラビア文字に馴染みが深い。現在でも、クドゥスでは、この雑誌と同名の出版社がペゴンによるイスラーム学テキストを数多く出版している。

巻頭言によると、この雑誌は現地におけるイスラームの発展に資するために出版され、興味のある人々に、民族の区別なく、無償で配布されていたらしい。出版費用は、読者からの寄付と広告費から捻出されていたらしく、巻頭言でも比較的余裕のある読者に対して、寄付を募っている。また、読者からは、イスラームに関する質問・問題も募集しており、これに答えるコーナーが用意されている。理由は定かではないが、読者には、仮名ではなく、本名で投稿することを求めている。読者として、字を読む層だけではなく、雑誌を

読み聞かせてもらう層をも対象としており、その点に配慮をおこなっている点が興味深い。イスラーム改革派団体ムハマディヤの雑誌であるにもかかわらず、意外にもローマ字ではなく、アラビア文字を選択しているという点を含め、この雑誌は、ムハマディヤの地方での活動の一端を明らかにする上で貴重な史料になりうると考えられる。

(文責：菅原由美)

2. 『ファジャル・サラワク Fajar Sarawak』 巻頭言

『ファジャル・サラワク (サラワクの黎明)』は、1930年(ヒジュラ暦1348年)に創刊され、ジャウィによって書かれた新聞(surat kabar)である。当時のサラワクは1841年から白人王であるブルック一族が世襲支配していた。

『ファジャル・サラワク』は月に二回、首都であるクチンで発行された。巻頭言は最初に、サラワクでこの新聞を発行し、理想を伝え実現していく際の、アッラーによる援助と力添えを切望する言葉から始まる。こうした言葉に見られる様に、イスラームが重要なものとして示されている。また同時に、当時のサラワク王国第三代国王であるチャールズ・ヴァイナー・ブルックを讃えて、彼の王国のもとで啓蒙活動を行い、理想を実現していこうとしている。

今回は発表者の都合により巻頭言のごく最初の部分のみの講読に終わってしまったが、今後講読を進める際の注目すべき点が多々議論された。その一つに、巻頭言の中にはバンサという言葉が出てくるが、華人、マレー人、イバンが三大集団を形成し、その他にも多数の民族集団が存在するサラワクにおいて(都市部では華人、マレー人の割合が比較的高い)、バンサとは誰を対象としているのかと言う点である。これは、イスラームへの言及と共に、同時に非ムスリムである国王への賛美と重要性に言及していることと併せて、この新聞の性格を考える上で重要である。今後講読を進め内容を更に分析していく際には、上記のことも含め、当時の政治・社会状況などより多面的な考察を行なっていきたい。

(文責：富田暁)

3. イスラーム雑誌『alKisah』とサイドの商品化について

本報告では2003年にインドネシアのジャカルタで創刊されたイスラーム雑誌、『アル=キッサ(alKisah)』の内容とサイドの商品化について議論を行った。アル=キッサは『サビリ(Sabili)』や『ヒダヤ(Hidayah)』といった、先行するイスラーム雑誌のマーケットに加わる形で創刊されたが、これら二誌との最大の違いは、アラブ系、特に預言者ムハンマドの子孫であるサイドに関する記事が多いことである。サイドのウラマーはハビーブという尊称で呼ばれているが、アル=キッサで毎号表紙を飾るのはハビーブの写真であるし、付録のピンナップやDVDもハビーブ関連のものがほとんどである。アル=キッサの編集長もサイドであるし、編集部スタッフにもサイドが多い等、一見するとサイドが自分たちの宣伝のために創刊した雑誌とも受け取れる。しかしこの雑誌は創刊当初からサイドに関する記事に力を入れていたわけではない。雑誌の編集方針がまだ定まらない時期にサ

イイドのウラマーに関する記事を掲載したところ読者や販売業者の評判がよかったため、サイドを中心に据えた誌面作りが行われるようになったというのが編集部による説明である。

アル=キッサの主要な記事は、イスラーム関連の物語で構成されており、これが雑誌の名前（キッサはアラビア語で「お話」という意味）の由来でもある。物語はクルアーン、預言者、教友、スーフイズム、有名な聖者に関するものが多いが、これらの中に東南アジア在住サイドや彼らの祖先についての物語が混じっている。記事の中には東南アジアのイスラーム化に触れたものもあり、東南アジアにイスラームをもたらしたのはサイドであるという歴史観も示されている。また、サイドたちの故郷である南アラビアのハドラマウト地方（現イエメン共和国）にある宗教学校、ダール・アル=ムスタファーの学長であるウマル・ビン・ハフーズ（ハビーブ・ウマル）の東南アジア訪問や、ハビーブ・ウマルのもとで学んだインドネシア出身の学生の活動はたびたび記事の中で取り上げられている。これらの記事が、結果としてサイドの歴史観や現在の活動の宣伝となっている。

しかし、この雑誌の編集方針に対して批判的な見方をする人々も存在する。興味深いのは、雑誌を批判する人々の多くがサイドであるという点である。批判の内容はさまざまであるが、大きく分けると、1. サイドの活動は様々であったにも関わらず、聖者や奇跡の話が強調されている、2. 若いサイドをハビーブとしてプロモーションすることは他のムスリムのためにも本人のためにもよい結果をもたらさない、3. 雑誌の中ではサイドがまるで商品のように扱われている、4. 雑誌の中に現れているのはスンナ派のシャーフイー法学派に属している人々の考え方であり、イスラームの多様なあり方を反映していない、などが挙げられる。このうち4の観点から批判を行っているのはシーア派であったり、シーア派の思想に理解を示していたりする人々である。本報告では特に2の批判を取り上げ、雑誌の中の記事や付録のカレンダーなどで若いサイドと、ウラマーとしての評価が定まっているサイド（多くは故人）が同列に扱われ、結果として若いサイドが実力以上の能力を持っているような印象を与えていることを示した。

アル=キッサは2009年には創刊6周年を迎え、商業的には成功していると言える。これは、インドネシアにおけるイスラームの商品化の流れの中で、サイド、ハビーブ、聖者、奇跡という組み合わせが商品としての価値を持っていることを示している。

（文責：新井和広）

次回研究会は、黒田景子氏（鹿児島大学）が出席する予定になっていた、パタニ（南タイ）の歴史資料に関する国際会議の報告をしていただくと考えていたが、件の会議にはジャウィ文書とは全く関係ないものだとのが後から判明した。当初、第2回研究会は10月はじめの開催を予定していたが、それが11月なかばにずれこんだこともあり、これ以上の研究会開催は実質的に困難であるという判断から、当研究会をもって共同研究プロジェクト「マレー世界における地方文化」は終了することとなった。